

ハンターkorori、『海賊王の秘宝』を巡る冒険の記憶をここに記す。

---

11月某日、自分は途方に暮れていた。GI大会への出場を今年のハンター活動の目標とし、その権利を手にしたところまではよかった。

今回はチームでの参加が必須条件だ。が、いつも活動を共にしている相方は事情により参加不可能。これまで機あるごとにチームを組んでくれていた仲間達も皆反応が薄い。無理もないか。今回は参加のための時間的・金銭的負担が大きいのだ。それぞれの事情もあるだろう。それとももしかして、掲げられている高額な優勝賞金にドン引きしてたりするのか…？

ともあれ、GIへの参加はエントリー前から頓挫した。もう誘える仲間はいない。急激に冷めていくGIへの意欲、そしてハンター活動への情熱。最後の望みとして声をかけたのが「ヤマパン」だった。

「良いっすね。俺達で1000万掴みに行きましょうよ！」

救世主降臨！！

ここに「ダイゴロー」も加わり、GIへ挑む「チームSSSG」が結成された。彼ら二人はJランクの新米ハンターだが、秘宝への情熱は燃えたぎっている。この情熱を推進力として秘宝への道へと向かうよう舵をとるのが、今回の自分の役割となるだろう。正直不安は大きい。だが、行くと決めたからには全力で挑もう。

---

12月4日、未明より宝島への旅へ出発する。

東京で合流したダイゴローは前日全然眠れなかったとのこと。一方せっかくだからと前日から一人松山観光を満喫していた余裕のヤマパン。それぞれがそれぞれのペースで迎えた当日。三津浜港でメンバーが揃い、改めて「海賊王の秘宝」発見を誓い合った。

一路、船に揺られて宝島へ。波に揺られる船に平衡感覚が揺さぶられ、唸るエンジン音に会話の声はかき消され思いのほか静かな船旅となった。チームの仲間は、そして他のハンター達はこの時間秘宝に思いを馳せていたのか。それとも船の揺れに静かに耐えていたのだろうか。

いよいよ宝島が近づいてきた。事前に写真は見ていたが、実際に目にしてみると雄大にそびえる青々とした山に戦慄を覚える。この山もすべて搜索範囲なのか。

上陸はイカダから浜へのジャンプだ。波のタイミングを見ながら、チームSSSGは三人とも靴下を濡らすことなく上陸に成功！幸先良し！身体コンディションも運も万全だ。

さて、島での滞在準備を整え、いよいよハンター協会から秘宝への手掛かりを受け取る。アベルの地図とロック海賊団鉄の掟だ。

なるほど、現時点では正直よくわからないが、まずは食料を確保しなければ海賊王の秘宝どころではないだろう。今日の目標はまずはこの二日間を生き延びるための最低限の食料を手に入れること。そして、できるだけ海賊王の秘宝への歩みを進めることだ。この両者のバランスは状況に応じて臨機応変に調整していこう。

当初の作戦としては、体力に自信があるヤマパンにダイゴローと組んでもらい搜索範囲が広そうな秘密の頂方面の食料を回収。自分は鉄の掟の暗号らしきものを読み解きつつ、迷いの森方面の食料回収と分担を行う。適宜連絡を取ることも忘れないよう念を押す。円陣を組み、気合いを鼓舞し、秘宝への情熱を再確認。いざ探索へ出発だ。

で、だ。海賊のアジトの裏手の斜面を上り始めすぐに実感した。何この斜面、キツくない…？これ、まだまだ序の口でしょ？この先の過酷さをいきなり突きつけられたようだ。これは意識をより引き締めなければ。

まずはドクロの巣から手に入れた宝玉を託され、いよいよそれぞれの道へと別れる。

冒険の記録として重要なのはここからなのだと思う。が、想定以上の過酷な道のりにより、正直写真や映像の記録や探索の記憶をしている余裕が無い。

一步踏み間違えれば崖下に真っ逆さまに落ちそうな道、どこに足を置いたらいいのかわからず上にも下にも動けなくなる崖面の移動、一步踏み出せば三步分後ろにずり落ちる急な登り斜面。果たしてこの島に楽に歩ける道などあるのか。足に、腕に、そして精神に疲労がどんどん蓄積されていく。そして追い打ちをかけるように、探している食料がなかなか見つからない。泣きそうになってくる。

そんなとき、ふと目を落とした鉄の掟。これは…！近くにいた自分が暗証番号を入手。秘密の頂に近づいていた仲間に託す。そして海賊王の地図をゲット！偶然ながら見事な連携だ！

さて、次なる悩みは自分の手元にある鳥の羽だ。これをアベルの末裔に届けたいのだが、仲間は既にその近くに行っているし自分の位置からはかなり遠い。どうする？届けに行くのが効率はいいか？

死神の尾根から眺める山頂の高さに軽く絶望を覚えるも、意を決して歩を進める。…が、あまりに急な上り斜面を相手に力尽きる。そこに颯爽と降りてきて羽を受け取り山頂へと踵を返すヤマパン。いや、カッコイイだろ！やがて戻ってきたヤマパンから手掛かりを受け取り、ダイゴローとともに拠点へ帰還してもらおう。

この判断が今日の最後にあんな冒険をもたらすことになるとは、このときは想定していなかった。

二人を見送り、斜面で休憩しつつここまでに入手した手掛かりを眺めていたら、山頂に行きたくなってしまったのだ。時間はある。体力はキツイ。どうする？…行きたい！これがハンターの性か。さすがに体力担当のヤマパンとはいえ、今からまた登って来いとは言えない。自分が行こう。

息を切らしながらたどり着いた山頂。アベルの末裔に会えたことにこんなに喜びを感じるとは。

頑張った甲斐あって何手か探索も進んだ。まだ奥へと探索を進めたかったがそろそろ戻らないと集合に遅れてしまう。仕方がない。今日はここまでだ。

帰り道の急斜面、歩いて降りるのは最初からあきらめて尻で滑って降りる。これも充分怖い。勢い余って木に激突したりしないように気をつけねば。

道中偶然一緒になった他チームのハンターと「無事にアジトまで下山する同盟」（勝手に命名）を組み、互いの安全確保と心の鼓舞をしつつ帰路を行く。すごく励みになって楽しい道中を過ごせた。ありがたい。

近づいてきた拠点で大きく手を振り迎えてくれるヤマパンとダイゴローが目に入ったときは、心の疲れが吹っ飛んだ気がした。身体の疲れは逆にどっと出てきた感覚だったが。

思いのほか大量に手に入った食材。自分を労わって率先して食材整理と調理を担当してくれた仲間たちに感謝しながら、三人でレモンサワーのプルタブを開けた。

---

12月5日未明、三人で身を寄せるテントに冷たい風の音が耳栓をものともせず耳に入ってくる。眠っているようないないような、そんな時間が過ぎていく。仲間たちはしっかり眠れているのだろうか。

外が明るくなり始めたころ、すっかりチームの料理人になったヤマパンの特性レトルトカレーが出来上がる。うん、美味しい。身体に染み込んでいく。

今日は海賊王の秘宝搜索の続きを行う。果たして見つけるられるだろうか。そして、他のチームの進捗状況はどうだろうか。気にはなるが、とにかく自分たちが秘宝を発見することだけを考えていこう。

昨日手に入れていた海賊王の地図を元に、初動の方針は打ち合わせ済みだ。昨日に引き続き機動部隊のヤマパン&ダイゴローのペアに秘密の頂方面の探索を任せ、自分は海賊のアジト周辺を担当する。昨日の食料探しとは異なり、見つけられるものを見つければいいと

いうわけにはいかない。互いに明確な役割があり、その後はそれぞれ臨機応変に動く必要があるのが今日の搜索だ。Jランクハンターの二人には昨日以上の負担を強いることになるが、本人たちの口からは昨日以上の自信に満ち溢れた言葉が出てくる。彼らにとって未知の世界であった「宝探し」「謎解き」の要領が昨日でわかったこと、宝島の地理や険しさを把握できたこと、そして何より「宝探し」の楽しさを感じてきたこと。なんだか嬉しいことを言ってくれる。

秘宝発見に向けて士気を鼓舞し、それぞれの探索へ向かう。

自分の初めの目的地は精霊の樹。昨日の探索で効率の良いルートは把握している。早々に到着し仲間からの連絡を待つ。仲間が暗証番号を回収する、そして自分がその暗証番号で宝箱の中身を回収するのだ。待っている間、昨晚からの懸念事項である解けていない手掛かりを考えるも、結局よくわからない。解読にはこの後手に入れる情報が必要なのだろうか？

やがて仲間から暗証番号発見の連絡が来る。正直、想定していたよりかなり早い。Jランクハンターたちは着実にレベルアップしている。

そうして当初想定していた手掛かりを回収し、次のことを考える。先程の懸念事項に関しては結局新たな情報は無い。これは今の状態で解けるものなのか。仲間たちには次の任務のために山頂へ向かってもらう。さて自分は…、結局山頂に行って合流するしか現時点ではできることはないか。

死神の尾根に差し掛かり目に入ってくるのは秘密の頂を冠する山の雄大さ。昨日登ったはずだがまた少し心が折れる。ここでちょっと現実逃避。こちら側でやり残していることはないだろうか。

で、刹那、…ん！？これは！なんだ、気付けば何てことないことじゃないか。そして向かうべき先は…、山頂の手前！すぐさま山頂に向かう仲間の位置を確認。ちょうどその付近！ナイス！すぐさま新たな手掛かりを共有し、自分は踵を返す。まだこちら側でやるべきことはあった。

これまで以上に道無き道を具体的な目標地点も定まらぬまま進む自分のルート、あの過酷な山頂までの道を行きさらに現地で考える任務を課せられている仲間たちのルート。それぞれの目標地点でそれぞれの目標物を発見し、それぞれの情報を合わせたとき意味深なもの目の前に現れる。禍々しい短剣？即座に仲間と共有する。返ってきた反応は「かっこいい」。…求めている反応と違うがまあ良い。

さて、問題はここからだ。これが本物の宝でないことはこれまでの情報から解読済みのつもりだ。周りの目を気にしつつ調べる、探す、試す。どういうことだ？状況を仲間に伝えつつ試行錯誤。わからない。ここでまだやるべきことがあるはずなんだけど…。

発見は急に訪れる。溜まった落ち葉を掻きだしたのが契機。観察力は大事だ。新たに表れたのは黄金髑髏。…さて、これは？これまでの情報を振り返る、整理する、考える。見落としは無いか、使っていない情報は無いか、そして悔いは無いか？仲間を確認。「やっちゃえ」「いいっす。ビール呑みたい」…信頼してくれてるってことなのかな？正直現時点で自分にできることはない。やるのであれば早いに越したことはない。ええい、ままよッ！発見報告ッ！！

一気に抜け去っていく緊張感、そして押し寄せてくる不安感。でも、もうどうしようもない。

仲間に安全な下山をお願いし、自分もアジトへ向かう。あれでよかったのか？考えれば考えるほど不安は押し寄せてくるが、もう後戻りはできない。誰もいないアジトで独り待つ長い時間。それを切り裂いたのは声を上げながら降りてきたヤマパンとダイゴロー。これはいい表情が撮れそうだとビデオを向けていた自分にお構いなしに飛びついてくる二人。自分の不安をぶつけるも、返ってきたのは「楽しかった」「ビール飲みましょう」との言葉。もう感謝せずにはいられない。後は天命に任せよう。

慰労を称えあった昼の太陽の下、三人で缶ビールのプルタブを開けた。

---

荷物を片付け、2日間を過ごした島を後にする。船の後部に席を取り島を振り返ると、この最高の2日間を提供してくれた多くのスタッフさんが見送ってくれている。こちら精一杯の感謝を込めて大きく手を振る。

人影が小さくなっていくとともに、島の尾根が、山の頂上が、そして島全体が目に入ってくる。到着時は不安と戦慄を呼び起こしたこの島の姿が、今は大きな達成感と満足感、そして沢山の思い出を輝かせる堂々たる姿に見えた。

大変なことに巻き込んでしまった。なんとか少しでも楽しんで欲しい。思えば当初は仲間に対してそんなプレッシャーが多くを占めていたのかもしれない。が、そんな気負いは見当違いだったようだ。ヤマパンにもダイゴローにも、探索面も生活面も精神面も大いに助けられた。そしてこの状況を積極的に楽しんでくれた。「本当に楽しかった」「誘ってくれてありがとう」の言葉が最高に嬉しかった。

揺れる船の上でのまどろみの中、そんな想いを馳せていた。